

平成29年度 学校関係者評価(結果)

学校番号	126	学校法人静岡理工科大学 静岡北中学校	記載者	廣住雅人
------	-----	--------------------	-----	------

学校教育目標	将来のScienceとSocietyを牽引できる存在感と思慮深さを持った人材の育成	【総合評価】 教員・生徒の関係がとて素晴らしい状態で構築されており、精神面で落ち着いた環境の中で学習に取り組むことができている。また、常に時代が求める最先端の教育に取り組んでいる点は、高く評価される。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望をもち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 時代が求める教育を展開する		4	浜松日本語学院の学生たちとの交流授業やタブレットを使った米国の大学生とリアルタイムな交流を実施することで、生徒たちのプレゼン能力を高めた。	留学制度の導入に関して検討をする。タブレット端末をの活用をした授業や、高校と共にデューブ・アクティブラーニングに関する研修を継続してもらい、一層英会話能力を高める。
2 法人内学校との連携強化を図る		4	理数科・国際科に進学する生徒数を増加させ、理数科においては、内進生のクラスを2クラス編成することができた。また、高校進学後も、内進生の状況を高校教員と共有した。	高校進学に向けての基礎学力の定着に期してはもとより、大学入試改革で能力を発揮できるように、生徒を育成する。また、大学・専門学校と連携したプログラムを増やす。
3 評価される進路実績作りを行う		4	理数科に進学する内進生の人数が増加し、個々の生徒のモチベーションが高くなったと感じられた。	大学入試改革を見据えながら、各教科での学習内容を結び付けて考えられる能力を持ち、バランス感覚のとれた生徒の育成に努める。また、様々な経験を積むことで、早めに大学への進学学部を決定する。
4 目標生徒数を獲得する		3	小学校6年の児童数が大幅に減少した状況の中で、55人で募集定員を充足することができなかったが、新たに導入された私学助成制度についての説明を説明会で行う等児童の呼び込みに努めた。	学校説明会と同時開催するイベントで、新たな参加型のプログラムを展開し、実施回数も増やす。また、個々の児童・保護者との接点を密にし、受験者数の増加を図る。説明会での強化も今後の生徒募集の手段として視野に入りたい。
5 中学棟の将来構想について考える		3	全体でまとまって、将来の中学棟の構想に関して議論する機会を設けることはできなかったが、将来構想につながるiPadの導入をしたことは、評価される。	iPadの活用を授業に関わる多くの先生方に研究してもらい、静岡北中学校ならではのICT教育の形を検討しつつ、将来的な中学棟の建設に向けての構想を検討していく。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	評価	成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	さらに一層、21世紀型スキルの育成をしていくことで、2020年の大学入試改革に対応しうる人材育成を継続的に行う。	CASEや言語技術さらにはSSZといった教育の展開で、いわゆる21世紀型スキルを高め、他校に勝る教育を展開することができた点は評価される。また、スカイセフやサイエンスフェアの場で、実践的な英語力をつけている点も評価される。	4	2020年の大学入試改革を見据え、そこで必要とされる論理的思考力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を持った人材育成を継続的に行った。大学入試改革への対応と対策に対する情報提供を熱心に行ってくれた。	従来から行っている21世紀型スキルを育成する教育を継続するとともに、様々な知識を応用し、自分なりの解を表現できる能力育成に発展させることで、成果を残せる人材育成に努めてほしい。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	中高間の情報交換がしっかりと行えるようにし、6年間の教育の中で人を育てるための教育プログラムを検討する。また、高等学校の核となる理数科・国際科に進学する生徒数を増加させる。	前年度と比較して、高校との情報の共有化は、双方のメンバーによるディスカッションの場が増加したことのできている。また、進路に関しても、静岡北高等学校の特色を、在校生に対して早期段階から伝え、よく意識啓発をしている。	4	中高間における情報交換を密にし、高等学校の核となる理数科・国際科に進学する生徒数を増加させることができたことを評価したい。内進生が、高等学校においても学習・生活の両面で活躍している点が評価できる。	中高間における情報交換の機会を増やし、6年間でのような生徒育成をしていくについて意見交換をし、理数科・国際科の中核となって活躍する生徒を育成する。そのためにも、各教科での習熟度別授業展開も検討する。
生徒指導	健全な中学校生活をおくれるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもとで確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	個々の生徒に応じた学習指導・生徒指導をする。そのためにも、定期的な会議にとどまることなく、フレキシブルな情報交換の場を設け、教職員全体で個々の生徒理解に努める。	定期的な会議に縛られることなく、適宜会議を開き、速やかに問題や課題解決に対応している。また、個々の生徒に応じた学習指導や生活指導を、家庭との連携の中で展開している点は評価される。	4	定期的な会議にとどまることなく、フレキシブルな情報交換の場を設け、教職員全体で個々の生徒理解に努め、個々の生徒に応じた学習指導・生徒指導をした。そうした教員の取り組みが、生徒から信頼される教員として、存在感を強く持っている。	個々の生徒の日常的な変化を、教職員間で共有し、適切な対応について情報を交換し指導に当たる。また、保護者からの情報も集め、適切な指導の方法を考えていくためにも、一層家庭と学校の関係を密にしている。

進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実行する。また、本校独自のキャリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応	次年度に向けて、理数科や国際C科に進学する生徒を増加させ、静岡県高等学校で中心的な活躍をする生徒を一人でも多く育てる。	自己評価にあるように、早期段階からキャリア教育を充実させることは、各学年でできていると評価できる。また、高等学校進学の際に、生徒の生徒の適性を考慮した進路指導を行うことができた判断できる。	4	次年度に向けて、理数科や国際C科に進学する生徒を増加させることができた。この状況が、次の学年の進路指導にいい影響を与える。	今後も、基礎学力がしっかりと身に付いた生徒、静岡県高校の理数科・国際C科の中核となり活躍できる生徒を進学させるよう努力されたい。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険箇所などの定期的な点検、スクールの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールの運行	学校法人全体で使用する安否情報確認システムを、うまく活用して、安否情報以外の通常の連絡体制を整えることで、生徒・保護者との連絡手段を新たに構築する。	数年前に中学独自の連絡体制を整えていたが、今年度は高等学校の方針を合わせて、新たな連絡方法などに関するシステム構築を再検討することはしたものの、確立させるまでには至らなかった。	4	学校法人全体で使用する安否情報確認システムを、うまく活用し、急な計画変更や行事における連絡など、安否情報以外の通常の連絡体制を整えることができ、生徒・保護者との連絡手段を新たに構築した。また、事故もなくスクールバスを多数運転することで、生徒の登下校の安全を確保している点の評価したい。	法人全体で構築されたシステムを、安否確認だけでなく、日々の連絡に積極的に活用するように検討する。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療勧告を確実に実行する。また部活動の活性化を図る。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化	個々の生徒の健康管理に関する情報を共有化し、突発的なことが起こっても、教職員が適切に対応できる体制をつくる。また、部活動顧問との連携をうまくとりながら、生徒の活躍の場を確保する。	生徒の健康管理に関する情報や対応についての情報共有化や有事実の報告体制はできていると判断する。また、部活動に関しては、行事との関連を考えた上で、生徒の活動時間を確保したと考える。	3	個々の生徒の健康管理に関する情報だけでなく、精神面に関する情報も共有化し、突発的なことが起こっても、教職員が適切に対応できる体制ができています。また、部活動顧問との連携をうまくとりながら、生徒の活躍の場を確保している。	個々の生徒の健康面・精神面での教職員間での情報共有は継続して行う体制づくりを継続して行う。また、部活動顧問との連携を取り、生徒が活動しやすい体制を作る。
特別支援教育	「知・徳・体」のバランスのとれた人間として成長させる教育プログラムを展開する。	CASE、言語技術教育、SSZといった本校独自の教育プログラムの推進と、心身の成長に即したキャリアデザイン教育プログラムの展開による支援	新たに、校内ネットワークを利用したICT教育の実践を、各教科指導の中で実践するとともに、情報を共有化し、生徒にとって効果的かつ魅力的な教育体制を提案する。	校内ネットワーク環境の整備に伴い、十分とは言えないものの、新たなICT教育の研究をはじめた。また、悩みを抱える生徒・保護者に対する教職員・スクールカウンセラーのサポート体制はできていた。	4	新たに、校内ネットワークを利用したICT教育の実践を、各教科指導の中で実践し、情報を共有化することで、生徒にとって効果的かつ魅力的な教育体制を提案していきことができた。CASEやSSZは、他校にないプログラムで、生徒の学ぶ意欲の向上につながっている。	Padの導入により、各教科内で、或いは日々の学校経営の中で、どのような活用方法が効果的であるかを実践・検証し、次年度により成果を上げることが期待できるか検討する。
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が職務を全うする。また計画的な予算編成や中長期的な観点から考え、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行う。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用	平成29年度からの第三期中期計画を計画を実行し、新たな学校づくりを進めると共に、高い意識を持った教職員集団を形成し、社会的な評価がより一層高まるよう努力する。	高校との連携の中で、中期的な学校変革のビジョンについての検討がなされ、平成29年度からの第三期中期計画が策定された。	3	平成29年度からの第三期中期計画を計画を実行し、新たな学校づくりを進め、高い意識を持った教職員集団を形成することで、社会的な評価は高まっている。	今後、学校の状況にあった形で、第三期中期計画の軌道修正をかけることができ、引き続き教職員一丸となって、目標達成に向けて業務遂行する体制を作る。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるが、計画的かつ時代が求める教師と becoming するための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、校外研修への参加、研修報告会の実施	第三次中期計画の実行段階に入る中で、改めて育てたい人間像や、カリキュラムマネジメントを検討する中で、学校の方向性を明確にし、教職員全体が一丸となって学校づくりに取り組んでいく。	ICT教育の展開は、中学校設置時の一つの目玉であったことを考え、ある意味原点回帰をする中で各教科での展開ができたことと評価される。今年度から整備されたWi-Fiの校内ネットワーク環境を利用したものは、また成長段階であるが今後に期待したい。	3	静岡県北中学校として、育てたい人間像や、カリキュラムマネジメントを検討した。また、高校と共にディープ・アクティブラーニングに関する研修を行い、今後の学校が進むべき新しい方向性を考えた。	引き続き、高校と共にディープ・アクティブラーニングの研修に取り組み、中学校における取組がどのような形でできるかを実践・研究していく。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	教員だけでなく、これからは生徒・保護者にとっても効果的なプログラムを実行することで、学校全体として意識を共有できるようにしていく。	外部講師を招いてのキャリア教育や心身の教育は、保護者との間でも日常の子育てのヒントになるものがあったと好評であった。	4	保護者との連携が取れている点は、高く評価できる。また、水質調査をしている点で、地域住民も優しく接するスタンスを持っている。	学習面・生活面において、学校だけの指導では、中々解決できないことが多いので、今後もより一層、保護者との連携のもとに、生徒たちの成長を支援する。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実に実行し安全管理に努め、生徒たちにとって快適な学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	タブレット活用において、より早く具体的な実践を展開した授業展開をしていく。	高校と一緒に、Wi-Fi対応の校内ネットワーク環境が整備されたが、タブレット端末の台数が少なく、教職員が活用する方法を十分に検討することができなかったことは、やや課題が残った。	4	Wi-Fi環境の整備から、タブレット活用ができる環境となり、教育環境が整備された。	各教科で、どの時期・どの学習内容で、タブレットを使うことが効果的であるかについて実践・研究する。SSHのための設備を増やし、更にSSHでの成果をあげていく。
				総合評価	4		